

平成25年度 本郷中学校
第1回 入学試験問題

国語

(五〇分 満点：一〇〇点)

注 意

- 一、指示があるまで問題冊子を開いてはいけません。
- 二、答えはすべて解答用紙に記入しなさい。
- 三、字数指定のある問題は、特別の指示がない限り、句読点、記号なども字数に含みます。
- 四、用具の貸し借りは禁止します。
- 五、指示があるまで席をはなれてはいけません。
- 六、質問があれば、だまって手をあげて監督者を呼びなさい。
- 七、試験が終わったら、解答用紙だけ提出しなさい。問題は持ち帰ってもかまいません。

【一】 次の①～⑤の——線部について、カタカナの部分は漢字に直し、漢字の部分はその読みをひらがなで答えなさい。
 なお、答えはていねいに書くこと。

- ① 恩に報^はいる。
- ② 身を^こにして働く。
- ③ ユ^けツに協力する。
- ④ イサギヨしとしない。
- ⑤ シンコクする。

(1)

【二】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

『時間と自由』の著者である哲学者ベルクソンは、八〇年あまりの長い生涯の前半を一九世紀、後半を二〇世紀に送ったフランスの哲学者です。世界的に知られ、やがてノーベル文学賞も与えられる彼ですが、本書『時間と自由』は、彼が三〇歳の時に発表した最初の著作です。

冒頭、ベルクソンはこう述べます。「私たちは自分を表現するのに言葉に頼らざるをえないし、またたいていの場合、空間の中でものを考えている」(序言)。ここにはすでに、本書の核心となる思想が示されています。

前半は簡単でしょう——「私たちは言葉に頼らざるをえない¹」。しかし、自分の思いを他人に伝えようとして言葉を費やすとき、いくら言葉にしても自分の思いがそっくりそのまま言えた、と感じるひとはたぶんいないでしょう。もちろん簡単に言えることもあります。「その塩をとって」「明日朝九時、駅前に集合」。職人の親方であれば、「石板！」と言うだけで仕事がスムーズに進むには十分ですし、それ以上くどくど言えばかえって仕事は滞^{とどま}るでしょう。日常生活の少なくない部分は、そんなふうに流れていきます。

ところが、うまく言えないこともまた少なくありません。長い時間を共有してきた親友と別れなければならない時、どうやって相手に自分の今の思いを伝えればいいでしょう。そんな便利な言葉はないこと、言葉を重ねればかえって嘘^{うそ}になってしまいかねないこと、そんなことは誰でも知っています。「感謝」「悲しみ」「さびしさ」——そんな言葉には、私がじかに経験し感じていることのほんのひとかけらしか含まれていません。じれったくて、私たちは苦しまぎれに「強い」とか「この上ない」とか、あるいは逆に「並みの」「ちよつとした」「かすかな」などの形容を加えて、いわば諸成分を並べて気持ちの全体を表現したりします。そんなことをしていると、世論調査の支持政党分布の円グラフのようなもの、あるいは食品成分表の同心円状のチャートグラフ(六角形とか星形に線が引かれるあれです)みたいな何かができあがるかもしれませんが、まさか自分の心が本当にそんなグラフで表せられると思っているひとはいないでしょう。ところが、私たちはそんな簡単なことも時に忘れてしまうのです。

(2)

後半の「空間の中でもものを考えている」という言葉は少し分かりにくいかもしれませんが、一つめのことはもう言ってしまった。たとえば「悲しみ」という言葉がありますが、それを「強い・弱い」と形容しただけで、どうしても私たちは頭のなかで、伸び縮みする棒グラフのようなものを思い浮かべてしまいます。「大小」で考えるというのは、すでに「空間の中で」ものごとを考えてしまうことです——「数学」や「英語」の点数が上下するがごとく「悲しみ」のポイントも上下するかのよう。

けれども、いつも乗るバスに遅れてしまった気持ちと、遠くに行く親友と別れなければならない時の気持ちとを、同じ軸に並べられるでしょうか。言葉にすれば、そこにあるのは「喜び」ではありませんから、ひとまず「悲しみ」と言うしかないのかもしれない。でも、バスに乗り遅れたがっかり感を大きくすれば、別れの気持ちになるでしょうか。別れの気持ちを弱めていけば、がっかり感になるでしょうか。どちらも、ならないでしょう（だいたい、「大きくする・弱める」っていうのが意味不明です）。つまり、もともとそれらは同じ「悲しみ」としてくられるはずのない質やニュアンスをそなえた、それぞれ独自のものだったのです。それらをあえてくった上で同じ軸で比べて、あたかも空間に引かれた一本の数直線上での「A」的な「大小」だけで区別できるように思うとき、私たちはすでに「空間の中で考えて」います。私たちは、自分がじかに意識しているのとは別のものをこしらえて、その代用品としてしまったのです。

ベルクソンは『時間と自由』の第一章で、私たちのさまざまな心理状態を順に取り上げつつ、それらが「一般的な名詞や形容詞（努力、嬉しい、痛い等々）」プラス「大小（強弱）」としてありのままに描けるものではないことを事細かに示しています。いや、感情とかならともかく、音や光の感覚だったら、「より大きな音」「より弱い光」と言えるのではないかと、言うひともあるでしょうか。音の大きさや高さ、光の強さは、数字で測れるではないか、というわけです。しかしベルクソンはそこにも誤解を見ます。音や光の感覚の物理的な原因は、確かに測れますし、数字にもできます。ところが、意識がじかに感じるのはあくまで色彩や音色といった「B」的なものの、私にとって独特のニュアンスを帯びた性質です（感覚に即する限り、白と灰色は別の色であって、灰色は弱い白ではなく、また黒は弱まりきった白ではありません）。それなのに、私たちは原因の量的な「強弱（大

小）」でもって、自分が感じている性質も同じ「強弱（大小）」を持つものだ、と解釈してしまうのです。そう考えて言葉に移した方がコミュニケーションには便利だからですし、無限の色彩のニュアンスを表す言葉など実際には存在していないからです。「空間の中でもものを考えている」という言葉には、また別の意味もあります。それは、ものごとをはっきりと区分して、数えられるような「要素」の集まりとして捉える、ということです。

私たちはいつも、自分の外のものごとにはかり気をとられています。見回せば、机の上にペンやノートがあり、鞆の中には教科書やノートが入っています。ペンはペン、教科書は教科書で、それらが混じることなく、並べられていたり中に入っていたりします。実際に空間の中に存在するものについては、それでいいのです。客観的な空間の中にある限り、他人にとってもペンはペンですし、教科書は教科書なので、むしろそれらが勝手に別のものになったり溶け合ってしまうては困ります。同じものは同じものでなければ、言葉でのコミュニケーションが成り立たないでしょう。それで、私たちは、ものに名前をつけます。自分たちに名前をつけます。そしてさらに、自分の心の中にあるものにも、「喜び」や「悲しみ」といった名前をつけ、それらが机や鞆のような一種の「もの」だと考えることになってしまいます。目に見える客観的な空間の中には場所を持たないはずの主観的なものごとすら、あれこれの「もの」のように考えてしまう——ベルクソンが指摘したいのはこのことなのです。

先に言ったように、心を強弱さまざまのパーツ、諸要素の集まりとしてイメージするというのは、すでにそんな考え方にとらわれてしまっているということです。確かに、親友と別れる時のあなたの心の中には、これまでその親友と過ごしてきたあれこれのエピソード、その時に感じたあれこれの気持ちなど、さまざまな「要素」が含まれているはず。そして今のこの気持ちの深いものであればあるほど、それらの「要素」は書き出せないまでに多くなっていくことでしょう。だからこそ、それを一言で表せる言葉などはないわけです。かと言って、私の心を満たすものを一個一個切り出して、ノートに書き出していけば、今の気持ちになるでしょうか。それを表せるでしょうか。料理のレシピなら、材料とその分量を指示された通りにかき混ぜれば、望みのメニューを作れるかもしれませんが、でも、私の心はそうしたものではありません。あれこれのエピソードは全体としていけば溶け合いながら、時間をかけて熟してきて、私自身の一部となっています。今のこの気持ちには、長い時間の全体がいわばた

たみ込まれているのです。それをノートに書き出してみても、ひからびた言葉が並ぶばかりでしょう。

ここで大事なのは、私たちは本来、あと戻りのできない「時間」の中で、「時間」を重ねながら生きているということです。そこで私が何を経験し、何を感じてきたのか——それを、上滑りするありきたりの言葉によつてではなく、じかに知るためには、私が過^{注3}ごしてきた長い歳月をそのままに、早送りなんかせずに経験してくるしかないでしょう。人間の生涯が問題になっている限り、ダイジェスト版で分かることなどたかが知れています。もし誰かが、私のことを完全に理解すると豪語^{注4}するのであれば、一瞬たりとも省かずに、私が経験してきたこと、これから経験していくことをすべてそのままに経験してもらわなければならぬでしょう。早送りや先回りなどは許されないのです。

ところが時にひとは、こうしたリアルタイムの時間が省略できる、と考えてしまいます。^{注5}「空間の中でもものを考える」という言葉のまた別の意味はこれです。「空間」——イメージしにくければ、さっきのノートのようなものを思い描いてもらっても構いません——においては、あらゆるものが同時に一気に並べ広げられています。ピアノ曲の楽譜を考えてみましょう。そこにはすべての音が、最後の小節まで、すでに記されています。ところがそれを時間の中であらためて演奏すれば必ず新しい何かが生じます（だからひとは同じ楽譜を何度も飽きずに演奏するのでしょう）。空間の中に並べられて見通せたはずの音符は、時間の中に戻されると、それまで見たり聞いたりしたことのない経験を私に与え、思いがけない新しさを私に与えることができるのです。いや、むしろ「空間」のほうが、私たちがいつもじかに生きている時間の流れを、動かなくて捉えやすい「要素」の集まりへと固めてしまったのです。

ベルクソンと言えば「純粹持続」という言葉が有名です。この「持続」というのは、動かない楽譜の小節番号や日記の日付のようなものではありません。それは、これまで述べてきたような動かない「空間」とはまったく異なる、具体的な「時間」の継続のことです。もはやすべてが終わってしまったかのように見渡せる、刻まれて動かない年号や時刻ではなく、今ここに流れ歩み進んでいく私のじかの経験のありさま、そのもののことです。ノートや楽譜や年表なら、私はそれらを動かない風景のように外から見渡すこともできるのでしょう。先回りだつてできるのでしょう。対して「持続」とは、私が内側から徐々に経験していくし

かない時間のことです。私たちは誰もが、刻々と、この自分だけの「持続」を歩んでいます（こう読みながら、あなたは「持続して」いるのですよ）。そして誰も代わりになれず、早回しも一時停止もなしに、この「持続」の中で、ありきたりの言葉などにしようもない微妙なニュアンスの変化が、私を染めていきます。その中で、他の誰でもない私自身の感じ方、考え方、振るまい方が形成されていきます。今この時にも、それは進行中なのです。^{注7}私が生きているというのは、それ以外のことはありません。

（杉山直樹『自由に生きること』とは 問題作成の都合上、本文には省略した部分があります。）

注1 ニュアンス……………微妙な意味合いや色合いの違い。

注2 エピソード……………出来事。

注3 ダイジェスト版……………内容をわかりやすくまとめたもの。

注4 豪語する……………いかにも自信ありげに大きなことを言うこと。

注5 リアルタイムの時間……………実際の時間。

問一

A

B

には、対になる漢字が一字ずつ入ります。問題文中から抜き出して答えなさい。

問二

線1「いくら言葉にしてもいいでしょう」とありますが、なぜですか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分の気持ちを言葉で正確に表現しようとして、どんなに言葉を費やしても、それは気持ちの一部を列挙するだけで、言葉と気持ちがぴつたりと一致することはないから。

イ 日常生活の大部分では、自分の気持ちをくどくどと説明すると、かえって物事が円滑に進まなくなってしまうので、ときには自分の思いを押し殺すことも必要だから。

ウ 複雑な自分の気持ちを相手に伝えるには、自分がじかに経験していることを表す言葉を探し集めて、気持ちの全体を表現するように努めなければならないから。

エ 言葉とは本質的に人間を裏切るものだから、自分の心に真正面から向き合わないと、相手を説得し、自分も納得できるような言葉を口にすることはできないから。

(7)

問三

線2「いくつか意味があります」とありますが、問題文中ではいくつかの意味について論じられていますか。漢数字で答えなさい。

問四

線3「私たちはその代用品としてしまったのです」とありますが、どういうことを言おうとしているのですか。その具体例として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 日本代表のプレーに一喜一憂しながら、サッカーの試合を観戦しているときの感情の起伏をまるで棒グラフを伸ばしたり縮めたりするように強弱をつけることで表現できると考えてしまうこと。

イ 特訓の甲斐^{かい}があつて、クラスで団結し、目標であつた運動会の騎馬戦での学年優勝を成し遂げたときの気持ちとお小遣いをもらったときの気持ちを強めたものが同じものだと思ってしまうこと。

ウ 普段から親への感謝の気持ちを抱いていても、なかなかそれを伝えることができないだけでなく、むしろ面と向かうと感謝の気持ちとはまったく逆の気持ちを表す言葉を言ってしまうこと。

エ 自分が大切にしていたものを失くしてしまったときの気持ちを表そうとしても、自分の「悲しみ」を十分に表現してくれる言葉などないから、泣きじゃくることで言葉の代わりとしてしまうこと。

(8)

問五

線4「誤解」とありますが、どのような誤解ですか。その内容に当たる部分を解答らんに合うように問題文中から四十五字以上五十字以内で抜き出し、最初と最後の三字で答えなさい。

問六

線5「長い時間の全体がいわばたたみ込まれている」とありますが、これを親友と別れる場合で考えるとどういうことになりますか。解答らんに合うように四十字以上四十五字以内で説明しなさい。

問七 ―線6「また別の意味」とありますが、どういう意味ですか。その具体例として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自分の人生の出来事を日記に記録し、絶えず読み返すことで、自分を理解しようとする事。
- イ これまで自分が過ごしてきた場所や家よりも、忘れられない思い出の方が大切だということ。
- ウ 自分が経験してきたことを自伝にまとめることで、自分の人生を表現できたと思えること。
- エ 自分の人生をDVDの映像のようなものだと考え、巻き戻しや早送りができると思うこと。

問八 ―線7「私が生きているというのは、それ以外のことはありません」とありますが、どういうことですか。その説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 人生とは、他人と異なるその人独自の人生を表現するのにぴったりの言葉を求めて、さまよい続ける終わりのない旅のようなものということ。
- イ 人生とは、具体的な時間の流れの中で、実際に感じたり考えたりすることを積み重ねることで、自分が作りあげられていくことだということ。
- ウ 人生とは、振り返ることはできなくてもいいが、決して先回りや一時停止はできずに、留まることを知らずに流れ続けていくものということ。
- エ 人生とは、いろいろな経験をするなかで、他人からの影響を受け、時には自分の個性を破壊されながら、次第に人格を形成するものということ。

問九 問題文の内容の説明として適当なものには○、不適当なものには×をそれぞれ記入しなさい。(ただし、すべて○、すべて×と解答した場合は採点の対象としません)

- ア 「私たち」の日常生活において、言葉によって相手に自分の思っていることを過不足なく伝えられる状況は少ない。
- イ 本来それぞれ独自である気持ちを、ベルクソンは一般的な名詞や形容詞でまとめ、それに強弱をつけることで区別できると考えている。
- ウ 「私たち」は、料理のレシピが材料と分量で表せるように、心を区別したり数えたりすることのできる「要素」の集まりとして捉えている。
- エ ベルクソンは、客観的に存在する「もの」と主観的な存在である気持ちを区別し、前者を空間的存在、後者を時間的存在と考えている。
- オ 「私たち」は、本来一望することのできない時間の中に生きているのに、この時間を一挙に見渡せる空間的なものとして思っている。

【三】 次の文章は、長崎県五島列島の中学校合唱部を舞台にした物語の一節である。

合唱部顧問の松山先生は、産休に入るため、中学時代の同級生で東京の音楽大学に進んだ柏木^{かしわぎ}に、臨時教員として一年間の期限付きで合唱部の指導を依頼した。産休中の松山先生は元々心臓が弱く、無事に出産ができるかどうか心配だという話が部員にも伝わる中、生徒たちが目標としてきた「Nコン」(NHK全国学校音楽コンクール)の長崎県大会の当日を迎えた。問題文は、九州本土の諫早市^{いさはや}の会場で行われた県大会の場面である。これを読んで、後の問いに答えなさい。

おおきな舞台上で合唱をするのは、はじめてではない。これまでにも何度かNコン^{注1}や朝コン^{注2}で歌ったことがある。入場する直前の舞台袖^{そで}ではいつも、小声ではげましあったり、わらったりしていた。不思議とそのようなとき、歌詞をさらって、どこをどのように歌おうなどというおさらいはしなかった。

頭のなかで百回歌えば、百回おなじに歌える。けれど実際の舞台ではそうならない。百回中の九十五回は平凡な演奏で、四回くらいノリの悪いダメな演奏があり、そして一回くらいは神²がかったような演奏ができる。本番のステージで、どうか奇跡の一回がまわってきますようにと祈る。練習しまくって、準備を万端^{ばんたん}にとのえて、最後の最後は、祈るしかない。

へ 中 略 へ

私たちの番だ。反響板^{はんきょう}の後ろから出て、ステージ上のひな壇^{だん}にむかう。視界が上下左右にひろがって、どこまでも広い空間に私たちは姿をさらす。一階席、二階席、ともにほぼ満席状態で、無数の人の顔がいつせいに私たちをのぞきこんでいるようにおもえる。さきほどの拍手がおわり、しんとしずまりかえた。

声³を発してはならない。音楽というパズルのピースになるのだ。ひな壇に上がる。音をたてないようにと注意する。ゆっくり、胸をはってあるくようにこころがける。履^はいているローファーが、カツカツと音をたてないようにと。

柏木先生が、下手側に配置されているグランドピアノの横に立つ。一応、楽譜を譜面台にたてかける。いつも見えないし、譜めくりをする人もいないけれど。

辻エリ^{つじ}が、たった一人、私たちの前に進み出た。客席からむけられる大勢の視線の圧力を引き受ける防波堤^{ぼうはて}のようだ。私たちは彼女についていけばいい。

舞台上手から順番に、男声パート、アルトパート、ソプラノパートの順に三列で整列した。司会者が私たちの中学校名を紹介する。指揮の辻エリが観客にむかつて一礼し、まわれ右をして私たちにむきなおった。柏木先生も一礼後ピアノに座る。

男声パートのならんでいる一画で、向井^{むかい}ケースケが派手なくしゃみをする。その音はホール内にひろがった。大勢の観客と、Nコンの運営をしている係員が彼のほうをふりかえる。くしゃみは意図的なものだ。下手側にあるグランドピアノから視線をそらせるため、上手側の向井ケースケが注意をひきつけてくれたのだ。その隙^{すき}に、柏木先生が服の裏にかくしていた携帯電話を取り出し、自分の足もとに置いた。折りたたみ式の携帯電話をくの字にして横たえる。その上に足首まである長いスカートの裾^{すそ}をかぶせた。一連の動作はすばやかたし、客席とは反対側の左手でおこなわれた。見ていた人がいたとしても、スカートの裾をなおしただけに見えただろう。通話中の携帯電話をステージに持ち込んでいるだなんて気づかれたら、減点どころのさわざではない。しかし、見咎^{とが}められてストップの声がかかることはなかった。

柏木先生の電話は、松山先生の妹のアカリさんの電話とつながっていた。五島のとある産科で、出産に立ち会っているという松山先生の旦那さんの手により、アカリさんの電話は、松山先生の顔のそばに置かれているはずだ。本番直前⁴、提案された計画に対して柏木先生は即断即決で賛成し、向井ケースケが廊下^{ろうか}で計画内容を広めている間、彼女はアカリさんに電話をかけて松山先生のもとに携帯電話をとどけるように指示を出したのである。

指揮をする辻エリが、私たちの顔を見渡す。彼女の表情に、さきほどまであった不安はもうない。運命^{いど}に挑むような決意が見える。ひな壇の私たちに電気のようなものが走った。全員がおなじおもいを共有していた。これまでに体験した、どんな大会ともちがっている。金賞をとって勝ち進みたいという願望もなければ、ミスをしないうかという恐怖も消えた。今、私たち

にあるのは、もつと純粹で、つよい心だった。私たちは、ただ歌を届けたかった。海をわたったところにいる、大切な人に。

「くちびるに歌を持て、ほがらかな調子で」ってね。それをわすれないで」

松山先生の言葉をおもいだす。きつと、その通りだ。どんなに苦しいときでも、つらいときでも、不幸なときでも、迷ったときでも、かなしいときでも、くちびるに歌をわすれなければ、だいじようぶ。私たちは涙をぬぐって、いつだって笑顔になれる。辻エリの腕がうごいた。ピアノの澄んだ音の粒が、きらきらとホール内に反射する。

課題曲『手紙（拝啓） 十五の君へ』。

へ 中 略 へ

永遠に、おわらなければいい。

声がぴたりとかさなったとき、いつもそうおもう。

最後まで息がつぎますように。自分がだいなしにしませんように。指揮する辻エリのすべての仕草が、スローモーションのように見えて、なんてかっこいいんだろうと涙ぐみそうになる。

やがて課題曲の合唱がおわり、ホールが静寂につつまれた。

課題曲と自由曲の合間に、無音の時間がはさまれる。自分の心臓の音さえはつきりと聞こえてくる。私の前に立っている一年生部員の肩がふるえていた。客席からむけられる視線の圧力がすさまじい。冷静でいなくてとはと自分に言い聞かせる。

「みんな、へへへ」

松山先生の言葉が頭の中によみがえる。一年前と二年前のNコンで、今とおなじように、課題曲と自由曲にはさまれた無音のステージ上でのことだ。指揮の松山先生が、客席に聞こえないほどの小声で言って、私たちにむかってにつこりとほほえんだのである。すさまじい緊張のなか、手も足もふるえそうになりながら、私はそのことをおもいだして泣きそうになる。

「へへへ」

ひな壇の上で私もつぶやいた。全員には聞こえなかったかもしれないが、周囲に立っている部員たちには届いただろう。

「みんな、へへへ」

すこしはなれたところから、横峰カオルのささやくような声が聞こえてきた。ちらりとそちらを見ると、目があつて、口元に笑みがひろがる。私の声が聞こえて、その言葉を遠くの部員につたえてくれたのだ。

「へへへ」

ソプラノパートの方から長谷川コトミの声も聞こえてくる。

伝言ゲームのように、ひな壇の上を、松山先生の言葉がひろがっていった。

一年生部員の肩のふるえが、すこしずつ、おさまる。

辻エリが私たちの顔を見ながら、胸のあたりに置いた両手のひらを上にうごかす。野球のサインのように決めていたジェスチャーのひとつだ。意味は「もつと声をおおきく」。彼女は柏木先生と視線をかわす。先生がグランドピアノのむこうでうなずいた。辻エリの両手が高く掲げられ、会場全体に緊張がはしる。彼女のうごきを合図に自由曲が始まった。柏木先生の指が音楽を紡ぐ。観客がはじめて耳にする旋律だ。

私たちの声が、ホールにひろがる。

合唱部に入って、友人ができて、ひまさえあれば歌っているという生活をおくっていると、クラスメイトの何人かに、おなじような質問をされた。つまり私が、なぜ合唱に興味をもったのか、ということだ。歌うことが好きだったから、という回答ではおもしろみがないのか、すぐには納得してもらえない。だから私はこう答えていた。

「みんなで歌っていると、お母さん注のことばおもいだすとよ」

はじめて合唱に触れたとき、隣に母がいた。

小学校にあがるすこし前のことだった。

その日、私は母の運転する車でとなりの町に出かけた。入り組んだ海岸線にそつて道はのびており、カーブをまがるたびに窓の外の景色は山と海とが入れかわった。体がかたむくと、手の中のドロップの缶が、からんと鳴った。

病院の駐車場に車が入る。母が診察を受けている間、私も側について（1）してはいくつはいけなかったのだが、その日はなぜか診察が長びいて、なかなか母は解放されなかった。私は退屈をつのらせ、こっそりと診察室を出て、外を散歩してみることにした。

明るい緑の庭を、入院患者とおもわれる人々があるいていた。日差しの中をあをるいていたら、どこからともなく美しい声が聞こえてくる。

病院からすこしはなれた場所に古い教会が見えた。私の住んでいる地域で教会はめずらしいものではない。当時の私はキリシタンの歴史的な背景なんてしらずに風景の一部として受け入れていた。アーチ型の扉がすこしだけひらいて、そこから歌声がもれている。口の中の飴玉が歯にあたってからこころと鳴った。

扉にちかづいて、なかをのぞいてみる。木製の長椅子が連なっており、そこに大勢の人が腰かけて耳をすましていた。奥の壁に大きな十字架が見える。その足もとに、シスターの服装に身を包んだ聖歌隊が横一列にならんで歌っていた。

友人のカトリック教徒によれば、小中学校の女子は聖歌隊の一員としてミサのときに歌わされることがおあったらしい。私がおそのときに見たのも、近所のカトリック女子によつて組織された聖歌隊だったのだろうか。

教会のステンドグラスを通過した陽光が、床板を赤色や青色や緑色にそめていた。入り口のあたりに立つたまま、私は歌声に聞き入る。教会の壁や天井に歌声が反響し、その場にいた全員をつつみこんでいた。透明な水に絵の具の滴をたらすと、が煙のようにひろがっていく。まさにそんなイメージが頭にうかんだ。聖歌隊の発した声が、になつて教会の内部にひろがっていく。どんな画家でもつくりだせないだ。どんな詩人でも言葉足らずになつてしまうようなだ。

ふいに肩をたたかれ、ふりかえると母がいた。

「ナズナ、さがしたよ」

歌声は高い天井をつきぬけてもつと高いところまで上がっていく。聴いている私たちもまた、歌声に引つ張られるようにして上昇していくような気がした。どこまでも、どこまでも、天井をつきぬけて、神様のいるところまで。

当時のことをおもいだすと、ドロップの甘みがよみがえつて、こめかみのあたりが（2）する。私が幼稚園のころに一度、母は手術した。小学生のころに二度目の手術があつたけれど、そのときにはもう、運命は決まっていた。母が死んで、父もいなくなり、私には合唱の記憶がのこった。

みんなの声がかさなり、音の渦に包み込まれたとき、母がすぐそばにいたような気がしてくる。

当時はとても悲しかった。

でも、もう今は、悲しいことなんてない。

自由曲の合唱が、おわりにちかづいていた。心を（3）しめつけるようなピアノの旋律だ。ここから遠くはなれた島に届いていることを心から祈る。母と子の耳に、私たちの歌声が届いていますようにと。辻エリの手のうごきにあわせて、私たちの声がちいさくなり、最後には闇へ溶けこむかのように消える。

静寂。

私たちにあたえられた十分間がおわった。

（中田永一『くちびるに歌を』 問題作成の都合上、本文には省略した部分があります。）

注1 Nコン……NHK主催「全国学校音楽コンクール」。課題曲と自由曲の二曲を合唱する。

注2 朝コン……朝日新聞社主催「全日本合唱コンクール」。

注3 お母さんのことばおもいだすとよ。……お母さんのことをおもいだすのよ。

問一 — 線1「不思議とそのようなとき、おさらいはしなかった」とありますが、これはなぜですか。最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 百回歌えばそのうちの九十五回は、結局平凡な演奏しかできないということを、みんなわかっているから。
- イ 今日までとことん練習を重ねてきており、あとは今までしてきた努力を信じるしかないと思っているから。
- ウ おおぜいの人の前で歌うことには慣れており、歌詞をまちがえるなどというのは、絶対にないことだから。
- エ 直前におさらいななどとすると、不安な思いばかり強くなってしまう、必ず悪い結果を引き起こすものだから。

問二 — 線2「神がかったような演奏」とありますが、これはどのような演奏のことですか。十五字以上二十字以内で、「演奏」に続くように書きなさい。

問三 — 線3「音楽というパズルのピースになる」とありますが、この場合の「音楽というパズルのピース」の説明として、最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 個人としての感情をすっかり失ったもの。
- イ 全体のために自分の個性を捨てたもの。
- ウ たったひとつ欠けてしまってもダメなもの。
- エ 他にいくらでもかわりがきくようなもの。

問四 — 線4「提案された計画」とありますが、これはどのような「計画」ですか。その目的が明らかになるように、五十字以内で具体的に説明しなさい。

問五 問題文中四カ所の《 》に当てはまる言葉として最も適当なものを次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 歌って イ 落ち着いて ウ がんばって エ わらって オ 元気だして

問六 (1) ～ (3) に当てはまる言葉を、次のア～クの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。(ただし、同じ記号は二度使えないものとします)

ア ほろつと イ どきつと ウ ぎゅつと エ けろつと
オ しゅんと カ じんと キ ひやつと ク じつと

問七 問題文中四カ所の□ に当てはまる漢字一字を答えなさい。

問八 □ に入れるのに最もふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア いっしょに歌ってくれる仲間がいるから。
イ 誰にたよらなくても自分には歌があるから。
ウ 歌っていれば母のことも父のことも忘れられるから。
エ 教会で聞いた歌声がいつでも自分を支えてくれるから。

問九 問題文全体を通して、語り手(「ナズナ」)は「辻エリ」のことを、どのような人物だと思っていることがわかりますか。二十五字以内で書きなさい。

問十 問題文全体の内容や表現についての説明として適当なものを次のア～カの中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 方言を多用することで、ふだんは島の中だけで生活している中学生たちの様子が表現されている。
イ 島に住む中学生たちが、コンクールに出場するために初めて島を離れた心細さがよく表現されている。
ウ 回想の場面を間に入れることで、主人公と合唱との関わりがよくわかるよう効果的に表現されている。
エ 擬人法をとるところどこに用いることで、島の美しい風景が視覚的に読者に伝わるよう工夫されている。
オ 中学生と大人の心情を対比的にえがくことで、思春期のゆれ動く思いをみずみずしく表現している。
カ コンクールの緊張感の中、良い演奏をめざして協力する部員の様子が生き生きとえがかれている。

国語解答用紙

二

②×5

①

②

③

④

⑤

三

④×1 ④×3 ②×2

問一

A

B

問二

問三

つ

問四

と「私たち」が考えてしまうこと。

問五

初

終

親友と別れるときの「私」の気持ちには、

40

といふこと。

問九

ア

イ

ウ

エ

オ

三

②×5 ④×2 ⑦×1

問七

問八

15

演奏。

問三

③×1

問二

④×1

問一

③×1

問四

⑧×1

問五

③×1

問六

②×3

問七

③×2

問八

問九

⑥×1

問十

③×2

二

10

三

45

三

45

総点

100

受験番号

氏名